



インターナショナル・ジャッジ・マニュアル

L 節

裁定

目次	ページ
L 裁定	
L.1 序文	L 2
L.2 ペナルティー	L 2
L.3 裁定の原理	L 3
L.4 手順	L 5
L.5 裁定人	L 6
L.6 結論	L 6

L.1 序文

抗議の裁定は、完全な抗議審問の形式でなく抗議を解決するプロセスである。裁定は、抗議に関係したセーラーと裁定人として努める経験豊富なジャッジ1名またはジャッジ2名の間の単なる短いミーティングである。すべての当事者が、参加することに同意しなければならない。当事者の誰かが拒否した場合には、裁定を続行することはできない。セーラーは水上で起こったことを裁定人に話し、裁定人は、違反があればどの艇が規則違反したかについて判定を行う。規則違反した当事者は、帆走指示書に規定された軽減されたペナルティーを受けることができる。裁定人の判定が受け入れられた場合には、抗議者は抗議を取り下げて、抗議が正式にプロテスト委員会により審問される前に、紛争が解決される。裁定の主たる目的は、完全な審問プロセスを必要としないケースに関して、抗議のプロセスを単純にし、スピードアップすることにある。

多くのクラスには、独自の裁定プロセスがあるが、全般の形式と最終のペナルティーは、ペナルティーのパーセントは別として同じである。

L.2 ペナルティー

裁定者が規則に違反したという艇が、その後の抗議審問で受けるかもしれない失格より軽いペナルティーを受ける場合にのみ、裁定が機能する。そのペナルティーは、帆走指示書に記載され、裁定の結果として艇が受け入れた場合には、水上で履行できたであろうペナルティーと規則 64.1 (b) に基づき同じ位置付けにある。

裁定でのペナルティーは、インシデントの時点で水上にいる艇が利用できるペナルティーよりは厳しいが、DSQ よりはかなり厳しくないことを勧める。大部分のジャッジは、参加艇数の小数点以下第1位を切り上げた30%か40%のいずれかの得点ペナルティーがほどよく機能することを知った。競技者が代替のペナルティーを拒否し、その代わりにプロテスト・ルームでDSQを回避する機会を選ぶと決めた場合、もっと厳しいペナルティーとなることが多い。より厳しくないペナルティーでは、競技者が水上で速やかに受け入れるペナルティーが軽んじられる。艇はDSQの得点より悪い得点を記録されることはない。他の得点のペナルティーと同じように、そのレースでの他艇のフィニッシュ順位の変更はない。従って、2艇が同じ得点となることがある。

フリートの後方でフィニッシュする艇にとっては、固定のパーセントの得点ペナルティーではほぼ失格と同じペナルティーとなる。固定の40%のペナルティーの代わりに、これらの艇に受け入れられるような裁定として次のようなスライドするペナルティーとすることができる。参加艇数の40%か、そのレースでの艇のフィニッシュ順位と参加艇数の差の50%に等しい得点のいずれか低い方。パーセントのペナルティーはすべて、規則A10に示す数値の丸め方を用いる。

ペナルティーは帆走指示書にはっきりと規定されていなければならない。水上で履行するペナルティーと同様に、陸上で受けるペナルティーは、抗議審問の場合を除き、どの艇に対しても適切なきは利用できる。そのことで裁定を経てのみ利用できるペナルティーがある場合に、もたらされる潜在的な不公平さを解決する。例：

- (a) ペナルティーが裁定でのみ利用できた場合には、裁定には不適切な状況で規則違反した艇は、より複雑でない状況で裁定に従って受けるのと同じペナルティーを利用できない。
- (b) 抗議者は、被抗議者が裁定に参加することを拒否することにより、少ない方のペナルティーを利用できることを拒否することはできない。被抗議者が裁定か裁定外かでペナルティーを受けることができる場合には、抗議者は裁定を拒否することにより有利とはならない。

- (c) レース後に利用できる一般的なペナルティーは、陸上へ戻ってきた後、規則違反を認めた場合のリタイア (RET) の代わりにペナルティーを艇が受けることを認める。

いかなる場合でも、受けるペナルティーは違反に対して適切でなければならない。リタイア以外のペナルティーを受ける艇は、傷害または重大な損傷を起こしてはならず、また違反により明らかに有利となることはできない。

L.3 裁定の原理

大会で裁定を検討する場合、主催者とプロテスト委員会が競技規則に関する裁定の影響を理解することが重要である。ここで記載したとおり用いる場合、裁定は『セーリング競技規則』2013 - 2016 とは矛盾しない。競技者の利害を保護する第 5 章 (抗議、救済、審問、不正行為および上告) の規則は、裁定により曲げられてはいない。第 5 章 A 節 (抗議、救済、規則 69 の処置) と第 5 章 B 節 (審問と判決) に組み込まれた保護すべては、適切なままである。

裁定の判定が抗議者により受け入れられた場合には、抗議は取り下げられる。取り下げない場合には、抗議はそのままで、第 5 章 B 節の規則に基づきプロテスト委員会により審問されなければならない。規則 63.1 (審問の要件) 参照。

競技者に第 2 章の規則または規則 31 が関係するすべての抗議は裁定を考慮されるということをレース公示と帆走指示書で知らせることが望ましい。規則 44.1 は次のような表現を用い帆走指示書で変更する必要がある。

第 2 章の規則または規則 31 に違反した艇がレース後で抗議審問前にペナルティーを受けることを認めるために規則 44.1 が変更される。そのペナルティーは参加艇数の 30 % または 40 % (どちらかを適用する) か、フィニッシュ順位と参加艇数の差の 50 % のいずれか小さい方に等しい規則 44.3 (c) で計算した得点ペナルティーとする。

裁定は、抗議書が提出された後に行われるが、抗議審問の前であってもよい。帆走指示書でオブザーバーを許している場合を除き、裁定の審問は、他の競技者やオブザーバーから十分離れた静かな場所で行い、屋外または小さい部屋で行うことができる。裁定の間に行われた証言は、その後の抗議審問で証人になり得る者の耳に入らないようにすることを勧める。裁定のジャッジ、抗議者、被抗議者のみが、出席を認められる。証人は許されない。競技者がそのケースで証人を必要とすると考える場合には、抗議は抗議審問へ進む。

裁定は次の抗議に限って用いることを勧める。

- インシデントには 2 艇のみが関係している。3 艇以上が関係している抗議は、ジャッジ 1 名または 2 名が 15 分以内で扱うには通常複雑過ぎる。
- インシデントは第 2 章の規則または規則 31 に限定されている。他の規則が適用される、または別の艇が関係していることが明らかになった場合には、裁定の審問は打ち切り、抗議をプロテスト委員会へ引き渡すことを勧める。
- 重大な損傷を起こしたかもしれない接触がない。

裁定の審問は、抗議審問ではない。審問の全体的手順の間、抗議が裁定で用いられるが、裁定人は、抗議審問の運営を決めている第 5 章の規則には拘束されない。裁定人と競技者は、裁定の審問での参加者が抗議はプロテスト委員会により審問されることを勧めると決定できることを理解しているとよい。競技者からのこのような要求は拒否してはならない。

裁定人は、抗議はやはりプロテスト委員会により審問されることがあるということを知って、審問を実施する。判定が受け入れられ、抗議が取り下げられるまで、裁定人は、決して規則の解釈についての議論に立ち入ったり、結論についての質問に回答したりしない。

抗議が抗議審問に移行した場合には、裁定人の主たる任務は抗議の起こりそうな結果を決定することにある。それには、プロセスの最初の関門である有効性が含まれる。このことには、抗議が無効である宣言される可能性を含む。例えば、抗議書に赤色旗がインシデントの3分後に掲揚されたと記載され、特別の理由がない場合には、これ以上進めない。抗議が無効であることを抗議者に助言する。

裁定の審問は有効性から始まるが、いくつかのクラス裁定手順には、言い回しが含まれている。

抗議の両当事者が裁定に同意した場合、各々は次のことに同意する。

(a) 抗議が有効であること、および……

このことでは、問題の事実についての徹底的な解明にはならない。このことが必要とされる場合には、その抗議は裁定に対して適切ではない。裁定人は『抗議を [被抗議者] にどのように知らせたか?』および『旗を揚げたか?』(適用される場合) または『プロテストと声をかけたか?』と尋ねる。被抗議者からの簡単な確認の要求は助けになる。長い回答は許可せず、旗やかけ声の時期には深く質問しない。

その後、裁定者の有効性の判定は、次のようになる。

無効	疑問	有効
----	----	----

すべての当事者に対して筋を通すために、限られた利用できる事実では有効性を疑問となったとしても、裁定人は続けることを勧める。

裁定人は、抗議が無効であると確信した場合には、続行しないことを勧める。そうである場合には、裁定人は抗議を取り下げることが提案するであろう。

有効な抗議については、時にはモデル・ボートを用いて、裁定人は、それぞれの当事者の証言を順番に取る。判定を行うときに、裁定人は、必要ならば質問するが、厳しい管理を保つ。証人は呼ばない。

判定を行うときに、裁定人は、証人から得られた証言や当事者のより厳しい質問が裁定人に示された事実を実質上変更しないという可能性を考慮する。

裁定人は次のように判定する。

- 1艇または両艇がそのインシデントでペナルティーを履行することを勧める。
 - 1艇または両艇が1つ以上の規則に違反したので、こういうことになるであろう。
 - 裁定人は、相手艇により規則違反を強いられた艇に対し、免罪の原則を適用する。艇 A が免罪される場合には、裁定人は艇 B がペナルティーを履行することを助言するであろう。規則 64.1 (a) 参照。
- 抗議を取り下げることが勧める。
 - どちらの艇も規則に違反していない、または抗議は無効であるので、こうなる。
- 抗議はプロテスト委員会へ進めることを勧める。

- 抗議は、証人なしで判定するには複雑過ぎるかもしれない、または裁定に適しない規則が関係しているかもしれない。

裁定人は、この3つの宣言のうちの1つに判定を限定する。裁定人は、その時点で判定の説明をしない。

全体のプロセスが、10 - 15 分以内で済むとよい。その時間を過ぎる場合には、問題は裁定に対しては複雑すぎ、裁定の審問を打ち切ることを勧める。抗議は、その後プロテスト委員会へ引き渡す。

裁定人の判定が受け入れられ、適切なペナルティーが取られた場合には、裁定人はそのあと、抗議者は抗議を取り下げたいかと尋ねる。裁定の審問では、プロテスト委員会は、裁定人に対して委員会に代わって処置し、規則 63.1（審問の要件）に基づき抗議を取り下げる要求を承認する権利を与えることに同意している。正当な理由があるが、抗議を取り下げる義務は抗議者にはないことに注意する。

抗議が取り下げられない場合には、抗議はプロテスト委員会により審問されなければならない。時には、被抗議者が抗議審問で DSQ と記録されるために、抗議者が抗議の取下げを拒否することがある。裁定人は、艇が適切なペナルティーを受け入れた場合には、規則 64.1 (b) が適用されることを説明する必要があることがある。このような場合、プロテスト委員会は、その後の抗議審問で抗議者にペナルティーを課することができるが、ペナルティーを履行した艇は、それ以上のペナルティーを課せられることはない。

抗議が取り下げられた時点で、裁定人は審問の当事者とインシデントの場面を討論することができる。ジャッジに時間がある場合、うまくいく裁定では、多くのあり得るシナリオの話し合いが続くことが多い。時間が限られている場合には、ジャッジは後で競技者と話し合うことを取り決めることができる。

抗議審問がある場合には、残りのジュリーで適正に構成されている場合を含み、裁定の決定は受け入れられなかったため、裁定人がジュリーのメンバーであることには十分な根拠がある。クラスと MNA の両者が、帆走指示書の一部または帆走指示書の最後の添付物のいずれかとして組み入れる独自の裁定手順があることが、見受けられる。

裁定方式を記載している帆走指示書で、このことについて詳細な情報を提供することができる。

裁定の審問の間に与えられた証言は秘密を保持しなければならない。裁定人は抗議審問の前にプロテスト委員会と裁定の様子を討論してはならない。裁定人により得られた先の証言は直接のものではないので、その後の抗議審問の間に裁定のジャッジは証人として呼ばれることはない。

当事者の一方が抗議審問でうそをついたことに対して規則 69 に基づくその後の審問がある場合には、裁定人は証人として呼ばれることがある。

L.4 手順

抗議がプロテスト・デスクに渡されたときに、抗議を受け取ったジャッジまたはプロテスト委員会セクレタリーは時刻を記録し、抗議者に待機することを求める。ジャッジまたは裁定人は抗議が裁定に適しているかを判定するために受け取った抗議を見直す。

大きな大会では、プロセスをスムーズに流すことができるようにするため2人以上の仲裁人がいることが望ましい。抗議が裁定に適している場合には、抗議者に相手艇の代表者

を見つけるように求め、裁定の審問は、できるだけ早く審問されるようにスケジュールを立てる。

当事者のどちらかが裁定の審問に来ない場合には、裁定の審問は進めない。裁定の任意性が規則 63.3 (b) を適用しなくしている。その後、プロテスト委員会セクレタリーは、その抗議を抗議審問するスケジュールを立てる。

ジャッジは、レース公示、帆走指示書、あればそれらの変更、現行ルールブック、時間の経過を保つための時計、艇の模型が利用できるとよい。「ケース・ブック」を手元においておくことも望ましいが、競技者が裁定のエリアにいる間はそれを参照しないことを勧める。ただし、裁定人が ISAF ケースを参考にしなければならない場合には、そのケースは既に裁定には複雑過ぎるものかもしれない。

あらかじめ作成したペナルティーの受け入れ用の書式は役に立つが、命令ではない。抗議書の最終ページには、抗議者が抗議を取り下げたことに関するチェック・ボックスがある。

裁定人は、規則 61.2 に基づき抗議の内容を訂正するときに手伝ってよい。判定が競技者に受け入れられない場合、裁定人は抗議書に判定を記載しない。

両当事者が裁定の判定に同意したとしても、抗議の取り下げは裁定人により承認され（規則 63.1）、抗議者が同意するまで裁定は完了していないことを覚えておくこと。裁定の間に競技者がペナルティーを受け入れるまたは艇が抗議を取り下げたことを署名する書式があることを勧める。書式が利用できない場合には、裁定人が「私はこの抗議を取り下げます」または「私は規則違反を認め、帆走指示書に記載されたペナルティーを受け入れます」という文言を書式に書き入れ、競技者がこの陳述に署名することを勧める。

裁定人は、もっともな理由があれば、裁定の審問の前に抗議の取り下げ要求を受け入れることができる。ただし、審問が進み、裁定人が抗議者に規則違反があったと判定した場合には、ペナルティーが受け入れられる前に、抗議者が抗議を取り下げたことは認められない。

裁定の判決は上告されない。規則 70.1 では、プロテスト委員会の判決のみが上告され得ると書いてある。抗議が取り下げられた場合には、抗議は残らず、上告するものは何もない。

L.5 裁定人

抗議を裁定するジャッジは、規則を強く駆使できる能力が高く経験豊富なジャッジであることを勧める。裁定人は、判定を素早く考えて、行わなければならない、またセーラーの尊敬を集めなければならない。非常に慎重なジャッジは、最もよい裁定人になるとは限らず、通常裁定によっては素早く解決しなかった複雑な抗議を解決するのにより価値がある。別のジャッジが裁定プロセスを知ろうとする場合には、両当事者の同意を得て、そのジャッジに裁定の審問をオブザーバーとしての参加を認めることが容認できる。ただし、裁定人もオブザーバーも後でその抗議を審問するかもしれないパネルにはつくことができないことを覚えておくこと。

L.6 結論

セールボート競技は自己規制のスポーツであり、水上での紛争を解決する方法は「プロテスト（または抗議）」と声をかけることから始まる。被抗議艇が水上でペナルティーを履行した場合には、紛争は解決する。被抗議艇がペナルティーを履行しない場合には、プロセスの残りは、形式張り過ぎ、時間がかかり過ぎることになると競技者には見られていることが多い。

抗議の裁定は、抗議がプロテスト委員会により審問される前に、抗議解決の中間的方法を提供している。裁定はセーラーに規則違反したと認めた場合、失格より厳しくないペナルティーを履行する機会を与えている。裁定はすべての抗議を解決しないが、第2章の規則または規則 31 が関係する大部分の場面で、裁定は、抗議審問に出席するよりは早く、形式ばらない、威圧が少ないものであると競技者から見られている。